

「信じられない」

ヨハネの福音書 20 : 24 - 31

April.9.2023

ヨハネの福音書 20 : 24 - 31 (パワポ)

Preface

皮肉なことに、主イエス様の復活を信じて当然の人が、信じる事が出来ない場面です。

イエス様と3年間寝食を共にし、イエス様が成されたこと、話されたことを一番近くで目撃し、体験し、イエス・キリストというお方がどういうお方なのかを最もよく知っているはずの12弟子のうち一人トマスが、「イエス様が復活されたなんてことは断じて信じられない」と言い切ります。

ある意味、トマスが言っていることは、私たちが教えられ刷り込まれ、当たり前のように信じている私たち社会が作り出した常識という先入観からしましたら、当然の感覚かもしれません。

神のご臨在豊かなエデンの園から追放されたこの世界に生きている私たちにとっては、人が死ぬことは至って当たり前のことですし、死んだ人が生き返って、「平安があなたがたにあるように」なんていう挨拶をしながら、物理的空間的制限を超えて、色々な人に現れたなんていうことは馬鹿げた話にしか聞こえません。

妄想じみた話、でっち上げた作り話だと思えて当然のことかもしれません。

つまり、トマスの「決して信じません」という言葉は、所謂、今の私たち人間の普通の感覚なのかもしれません。

ですが、この言葉が、イエス様に従っていなかった人たちの発言ならば、「まあ、そう思って当然でしょう」と思いますが、イエス様の寝姿や、イエス様の笑うところ、憤られるところ、食べたり飲んだり話したりしたその姿を一番近くで見て体験していた12弟子たち、その中でも、トマスが言ったということがある意味ショックなことであり、他の誰でもない、「え、あなたがそう言うの!？」とってしまうようなことでした。

トマスが、どういう人だったのかということを表わす一つの記述がありますので見てみたいと思います。

Part One

ヨハネの福音書 11 : 16 (パワポ)

「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

なんとまあ、血気盛んなトマスの言葉でしょうか。

トマスを除く11人の弟子たちには、トマスの目から見て、イエス様と共に死ぬ覚悟が無いように見えたのか、そんな仲間たちを鼓舞し、イエス様への忠誠を表すエネルギーと言いましょか、威勢のいい闘争心旺盛な言葉を発しました。

どのような状況でこういう言葉が発せられたのかと言いますと、

イエス様が首都エルサレムで、旧約聖書の御言葉のその真意を改めて宣べ伝えながら、ご自身のことを神の御姿なるお方であると仰り、ご自身を信じる者は父なる神を信じることであり、父なる神を信じることはご自身を信じることであるとお話しされたことに、「神を冒瀆している」と、ユダヤ人たちから命狙われるようになってしまいました。

そこでイエス様は、「今はまだ父なる神が定めた死ぬる時ではない」と、12弟子たちと共にそこから逃れるために、ヨルダンの川向こうに渡って行きました。

ところが、イエス様が愛しておられたラザロが病にかかり、死んでしまったという知らせをお聞きになり、再びエルサレム近郊のベタニアに行こうということになった時、発したトマスの言葉が、「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか」という威勢のいい言葉でした。

他の弟子たちは、「このままイエス様と一緒にエルサレム方面に行ったら、直ぐにうわさが広まって、殺されてしまうかもしれない」と、ビビったのかもしれませんが。

でもそんな中、トマスだけは違いました。

「イエス様と一緒に殺されに行こうではないか」と、一見、強い信仰心を表すかのような言葉を発しました。

さらには、もう既に死んで墓に葬られて四日経ったラザロが、イエス様の「ラザロよ、出て来なさい」という言葉に応答して、早くも死臭を発していた死体となっていたラザロが、手と足を長い布で巻かれたまま出て来たという死人の生き返りを間近に目撃までしました。

それまで、イエス様が何度も弟子たちに、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。わたしを見て信じる者はみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせる」とお教えになったことを、視覚的に認識出来るように示してくださった人のよみがえりというとんでもない事件を体験したわけです。

もちろん、ラザロのような死人の生き返りは、天の御国における、または約束の新天新地における究極的な復活ではなく、結局この地上での死をもって朽ち

果てていく肉体的限界のある終わる命ではありますが、「そんな馬鹿な！」と中々イエス様のお話しされるよみがえりの命の話を信じようとしなない弟子たちや人々に、主イエスの内にあるよみがえりが本当にあるんだということを教えるための視覚教材として、ラザロの生き返りを用い、肉眼で分かるように見せてくださいました。

そして、実際にこのラザロの事件を通して、たくさんの人々が主イエスを信じるようになるんです。

ヨハネの福音書 11 : 39 - 45 (パワポ)

Part Two

このイエス様を信じた者の中に、当然、弟子のトマスも含まれます。

他の弟子たちを鼓舞するかのような、自分の信仰者としての血気盛んさを表すかのような言葉を口にしたことが、報われたかのようなイエス様のお言葉通りにラザロが生き返ったことを体験したトマスにとっては、他の 11 弟子たちよりも、明らかに、このラザロの生き返りの事件は、強い印象として彼の心に刻まれたことでしょう。

さらには、イエス様ご自身が苦しみを受け、殺され、三日目によみがえるようになること仰ったあの言葉、12 弟子の年長者でありリーダーであったペテロは、「下がれ、サタン！」とイエス様に言われてしまうほどに、主イエス・キリストの十字架の苦難と復活を信じ受け止めることが出来ませんでした。

トマスは、あの威勢のいい言葉と共に、その言葉が無駄ではなかったというようなラザロのよみがえりを肉眼で見、体験したのですから、もしかすると、いや当然ながら、他の弟子たちよりは、主イエス様の死からのよみがえり、復活を期待し、信じ、受け止めていただろう、受け止めることが出来ていたのではないかと、私たち読者に期待を抱かせます。

しかし、しかしながら、今日の聖書箇所、ヨハネの福音書 20 章でのトマスの姿は、その期待に反し、他の弟子たちよりも、主イエスの復活を否定しているように見えます。

「私は、その手の釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れて見なければ、決して信じません。」

「決して信じない・・・」、先程の「主と一緒に死のうではないか」という言葉とは、真逆のことを、これまた結構の威勢の良さで断言しています。

これが、私たち人間の本性ですね。

どんなに神様が物凄いご計画をもって、私という人をお造りになり、私という人を生まれさせ、私という人を愛し、私という人に必要なものすべてを施し、私

という人を恵みをもって導き、私という人を今も変わらず導き、私という人を愛するこれまでの過程においてたくさんの奇跡を体験させ、たくさんのものを動員して語り掛け、守り、見、聞き、知っていて下さっているにもかかわらず、何一つ認めようとしなさい。

何一つ感謝しようとしなさい。

何一つ遜ろうとしなさい。

何一つ聞こうともせず、見ようともせず、神を拒むことや、自分を神のように王のように、自らを自らの人生の主人のように思い主張することにおいては威勢が良く、啖呵を切る、そんなものが、私たち人間の本性です。

人間の呼吸を保つのに必要な酸素の存在は、O₂と化学記号を決めて、あたかも人間の知恵が酸素という元素を発見し作り出したかのように見せ、その存在を信じますが、同じく目には見えないけれども、私たちの全領域において隅々まで把握しておられ、私たち自身でさえも分かり得ない私たち自身のことまで全部知っておられるお方を信じようとしなさい、その言葉を素直に「はい、そうですね。仰る通りです」ということも出来ない。

トマスのように、一時は神様に付き、また一時は神様を否定し、また一時はどっちでもない両方に足をかけておいて宙ぶらりんで、時と状況と気分次第で、どっちにでも転べるように中途半端で、そんな状態を「バランスを取っている」と主張しながら、「神をどうすれば、神という存在がいるならば、神をどうすればうまい具合に利用できるだろうか」ということばかりが、信仰だと思っている。

本当に神様の哀れみと赦しと見守りがなければ、信仰者としてさえもいることが出来ないような存在が、私たち人間です。

こんな私たち、トマスに対してイエス様が、どのように接しておられるのかと言いますと、ヨハネの福音書20：26からの御言葉です。

Part Three

ヨハネの福音書20：26－27 (パウロ)

「平安があなたがたにありますように」と、イエス様は、トマスを咎めることもなく、むしろ、「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい」と、トマスが啖呵を切った内容通りのことをしてあげました。

このイエス様のお言葉が、私にはトマスを責めているような言葉には聞こえてきません。

かえって、トマスの「本当は、僕だって復活したイエス様のことを信じたいし、お会いしたいし、お目にかかりたい」というトマスのその深い心の真意を当然のように理解され、その胸中に応えようとしてくださっている言葉に思えます。

「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」というイエス様の言葉も、トマスを叱っている言葉ではなく、「もうこれ以上、信じない者でいる必要はありません。わたしが、あなたを信じる者へと変えてあげますから」というお優しいイエス様の配慮の籠った言葉のように見えてきます。

私たち誰もが、誰もが、信じる前は、信じない者でした。

信じていないという時があつてこそ、信じるという価値が浮き彫りになり、際立ってきます。

信じていなかった、信じられなかったということをはっきりと認識出来てこそ、認識出来れば出来るほどに、信じる事が出来るようになったということが、神の恵みでしかない、神の恵み以外の何ものでもなく、まことの神を信じ、イエス・キリストなる神を信じる事が出来ていることは「神わざだ」と、賛美が自動的に出てきます。

私が歌いたいから賛美が歌われるのではなく、自然と賛美が出て来ずにはいられなくなります。

こんな粹なことをして下さったイエス様に対するトマスの言葉です。

ヨハネの福音書 20 : 28 (パワポ)

「私の主、私の神よ。」

感嘆しか出て来ません。

思わず出て来た言葉が、賛美です。

賛美しなくちゃ、賛美を歌わなくちゃという賛美ではなく、思わず心の中から溢れんばかりにこぼれ出て来てしまった賛美の言葉が、「私の主、私の神よ」です。

信じられなかったことがこの上もなく申し訳なく、信じていなかったことがとても馬鹿らしく思え、信じられるようになったことが、自分の努力や才能や決心によるものではなく、主イエス様の恵みであるということに心底同意し、賛同できた時の賛美の言葉が、「私の主、私の神よ」という言葉です。

Part Four

主イエス様の復活がいかさまで、でっち上げて、インチキであることを理性的に、知性的に解き明かして、世の中にキリスト教信仰の馬鹿さ加減を明示しようとするこの2000年間幾度となく繰り返されてきて、時には、一定の人々の指示を得て、「そうだ、そうだ」と称賛されるような人だったり、本だったりがあったりもしてきましたが、それよりもはるかに多く、真正直に理性と知性を働かせてイエス様の復活の間違いを正そうとした人たちが、あべこべに、「主イエスの復活は事実だ」と行き着いてしまった人々がいます。

本としては色々あると思いますが、ここ近年で、日本語で読めて直ぐに購入

できる本としては、リー・ストロベルという方が書いた「ナザレのイエスは神の子か？」という本があると思います。

理性や知性を用いてイエス様に出会っていくということも、神様のお働きだと思いますが、一方で、今日の聖書箇所のアナスタシオスのイエス様への出会い方は、論理立てて、科学的方法と言われるものを駆使して、理性や知性を大いに用いて出会ったというものではなく、至って経験的な、主観的な出会い方です。

イエス様というお方に出会っちゃった、出会っちゃったがために、その存在をもうこれ以上否定出来ない。

「いやあのね。牧師なんだけど、全然牧師に見えない、図体もデカイし、お坊さんのように丸刈りで、もし着せたら袈裟も似合うだろうし、むしろ住職と言った方が自然に思える人が、土浦めぐみ教会の主任牧師なんだよ。」

「え〜、そうなの？ そんな人が！」とどんなに言ったとしても、土浦めぐみ教会の礼拝に来て、私のことを見たら、「あ、本当だ。見た目住職の牧師だ」と認めざるを得ないように、経験的に、イエス様はトマスに出会っていただきました。

実は、この経験的なイエス様への出会い方というのが、現代において、物凄い威力を発揮している国や地域があります。

それは、イスラム教圏です。

多くのイスラム教国家は、キリスト教宣教や伝道が禁じられていますし、国によっては、クリスチャンになったということが分かたら即死刑なんていう国もざらにあります。

私が以前、短期宣教で行ったことのあるマレーシアなどは、外国人であろうが、マレーシア人であろうが、クリスチャンがクリスチャンでない人に伝道しますと、犯罪になります。

伝道した人のみならず、伝道された人も犯罪者として扱われ、逮捕されてしまうので、現地の人々は伝道されることをとても恐れますし、とても嫌がられます。

私が短期宣教で行ったその時は、現地の宣教師の方のコーディネートで、マレーシアの奥深い森の中のとある村に伝道に行ったのですが、四日経ちましたら、どこでうわさを聞き付けてきたのか、宗教警察なる方達が、四駆の車に乗って、村に伝道しに来ている外国人がいるようだと言ってきたことがありました。

その時、「あ、本当にこの国では、クリスチャンでいることが犯罪なんだ」ということを感じました。

オープンドアーズというアメリカの宣教団体が、毎年、クリスチャンやキリスト教に対して迫害の激しい国ランキングというのを発表しているのですが、ここ20年以上ほぼ1位の座を譲らないクリスチャン迫害大国が北朝鮮なんです。

クリスチャンだということが分かると、公共の面前で銃殺してしまうような国なんです、それ以外の迫害ランキングトップテンに入っている国々の

多くは、イスラム教国家なんです。

で、そんなイスラム教国家で、21世紀に入ってから少なくない数の人々がクリスチャンとなっている静かなリバイバルが起こっていると多数報告されているのですが、そんな宣教困難地域における宣教方法が、直接、夢だったり、幻だったりのうちにイエス様が現れなさるとのことだということを宣教師たちが論文や本で発表しているんです。

例えば、某国の宣教師が発表した論文の中で、実例が紹介されています。

その宣教師が運転をしていたところ、突然、銃を持った男たちに取り囲まれて、顔に袋のようなものをかぶせられ、手足を縛られて、車に乗せられて拉致されてしまいました。

で、その宣教師は、「ああ、遂に殉教するんだな。こうやって殺されて行くんだな」と思っていたところ、とある場所に付きました。

手足を解かれ、かぶせられている覆いを取り除かれて見ると、多くの男性たちが自分の方を見ていました。

そして、その内のリーダー格のような人が、「こんな仕方で、あなたをこの場にお連れしてしまったことをお許してください。こんな方法でなければ、あなたをお連れすることが出来ないということをご理解いただけますと感謝です。

私たちは、イスラム教指導者になるための学校で学んでいる者たちなのですが、夢や幻のうちに主イエス様が現れなさって、主イエス様が救い主で、神のひとり子で、唯一まことの神の御姿なるお方で、このイエス様が私たちの罪のために十字架に架かり、復活された神であられることが分かってしまいました。

そして、今は、隠れクリスチャンとして、この場所に秘密裏に集い、主イエス様を礼拝しているのです。

今日は、あなたから聖書の説き明かしをお聞きしたいと思っていますので、どうかお語り頂けますでしょうか。」

Part Five

鳥肌立ちませんか？

現代においても、イエス様は、父なる神様は、聖書に記されている通りの方法を、主イエス様が直接現れなさるという方法を用いなさって、宣教困難なところにご自分の存在を明らかにされております。

二進も三進もいかないようなところには、直接もう現れなさって下さり、経験として否定できないような出会い方をしてくださいます。

なので、ぜひ皆さんも、トマスのような求めが、渴望が御有りならば「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れて見なければ、決して信じません」と祈ってみるのも良いかもしれません。

私も一時期、「I want to see your face, I want to see your face, 私はあなた

の顔が見たいんです。私にあなたの顔を見せてください」とばかり、祈っていたことがありました。

でも、結局、これまでまだ一度も見せて頂いたことがありません。

直接顔を見せて下さることが、私にとって益にならないということを神様は、当然のように分かっておられるんだと思います。

もし、イエス様の顔を直接見たならば、ただでさえ高慢なのに、もっと高慢になり、自分の信仰を誇り、他者を見下げて、自分の経験を偶像化しかねない性質があることをイエス様は、よくご存じなんだと思います。

その代わりに、私は他のものを見せて頂き、体験させて頂き、かえって、見ないで信じることの幸いを少しずつ分かるようにさせて頂いております。

ヨハネの福音書 20 : 29 (パワポ)

イエス様を信じ歩み、主イエス様の、父なる神様の御言葉を毎日食しながら、神と会話を交わしながら、感謝を抱き、賛美を献げ、苦難があっても、病にあっても、環境や状況が整っていないなくても、信仰を持って生きながら、顔の輝きが増し加えられ、目の光が曇っていない輝いている沢山の方々に合わせて頂き、ヤコブが兄エサウに、「あなたのお顔を見て、神の御顔を見ているようです」と言ったあの言葉と同じような言葉が、心のうちに湧き上がってくるのが良くあり、直接主イエス様のお顔はまだ拝見したことはありませんが、イエス様を信じ歩む方々の主イエス様に似た者と変えられている顔をたくさん見させていただきました。

いつの日か、天の御国で、黙示録に記録されている通り、イエス様の強く照り輝く太陽のようなお顔を拝見することが、今は楽しみになっています。

そして、何よりも、この神の言葉である聖書の御言葉に現れている主イエス様を、以前よりも、毎日毎日、少しずつかもしれないませんが、肌感覚でお会いし、霊の目で見る事が出来るようにされていることを実感しております。

正に、使徒ヨハネが、30節、31節で言っている通りのことが、我が身に起こっていることを実感しております。

ヨハネの福音書 20 : 30 - 31 (パワポ)

イエス様は、復活されたイエス様のお姿を弟子たちにお見せになった以外にも多くのしるし、奇跡をなさいましたが、ヨハネはそれらのことをあえて記録しませんでした。

なぜか？

「今もうすでに聖書に書かれている内容だけでも、十分に主イエス様に出会う事が出来るからだ」と言っています。

今すでに、私たちが手にしているこの聖書だけで、十分にイエス様を信じる事が出来、まことのいのちを得るために必要十分な内容が記されています。

だから、イエス様にお会いしたいならば、復活されているイエス・キリストが本当なのか、本物なのかを知りたい、体験したいならば、聖書をそのまま味好みせず読んでみてください。

読んでみても、ちょっとこう、その味が分からないなあと感じましたら、書いてみてください。

人の作った考え出したお経でさえも、写経するのですから、神が人を通してお書きくださった神の言葉である聖書を書き写さない手はありません。

さらには、どんな小さな一言でも構わないので、その聖書の言葉を生きてみる、守ろうとしてみることに取り組んでみる。

もし本当にそうするならば、聖書が約束して下さっているわけですから、きっと、必ずや、復活のイエス様が会って下さることでしょう。

なぜか？

聖書が、約束して下さっているからです。

御言葉となられた神の子イエス様の言葉が、聖書の言葉だからです。

Conclusion

私たちが人に出会うというのは、顔を見たから出会うのではありません。

その人と言葉を交わした時に、その人と出会うのです。

手話でも、筆談でも、声として発せられる言葉でも、私たちは言葉を通して、その人に出会います。

神との出会いも同じです。

人格的な神様と、人格的に会うことも同じです。

言葉を聞き、言葉を知り、言葉を交わして、私たちは神に、救い主イエス・キリストに出会うのです。

イエス様にぜひ、出会ってください。

復活された救い主、今も生き、昔も生き、永遠に生きておられる主イエス・キリストなる神に出会ってください。

出会えるために必要な要素は、もうすでに私たちに与えられています。

あとは、それを用いて、主イエスに出会うことだけが残っています。

主イエスに出会い、我が内に住んでくださる神を体験なさってください。

そして、その証人となって下さい。

主イエス様が新たに、また、初めて皆さんに出会って下さることを期待いたします。 お祈りいたします。 祝祷：ヨハネの福音書 20：27